

特集

自然災害に備える

これまで北海道においては、激甚化する台風や豪雨、大規模地震など様々な自然災害により甚大な被害を受けてきた。

20～30年の周期で噴火を繰り返す有珠山が前回噴火したのは2000年。すでに23年が経過しており、いつ噴火してもおかしくない状況である。

日本海溝及び千島海溝沿いの海域では、マグニチュード7～9の大小さまざまな規模の地震が多数発生している。2011年に発生した東北地方太平洋沖地震では死者・行方不明者が2万人を超えるなど、主に津波により甚大な被害が発生した。千島海溝沿いではマグニチュード8.8以上の「超巨大地震」が約340～380年周期で発生しており、2021年から30年以内に発生する確率は7～40%と推計されている。

このような背景を顧みて、本特集は、近い将来に発生しうる災害への備えを今一度考える、という視点で企画した。

基調レポートでは、跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 コミュニティデザイン学科 教授 鍵屋 一氏に、自然災害から「人間の尊厳を守る」という観点でご寄稿いただいた。また、日本赤十字北海道看護大学 教授 災害対策教育センター長 根本 昌宏氏には、冬期における災害発生時の避難行動の注意点と、避難所での生活において健康を維持するために留意すべきことをご提案いただいた。そして、小清水町総務課長 細川 正彦氏には、フェーズフリーの考え方を採用した防災拠点型複合庁舎についてお話を伺った。

災害への備えは、避難や復旧のための道路や建物などのハード整備だけではなく、迅速な避難行動の促進や健康を維持できる避難生活環境の確保といったソフト面からの取り組みも重要である。多角的な視点から災害への備えを考えるきっかけになれば幸いである。

基調レポート

自然災害から「人間の尊厳を守る」

跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 コミュニティデザイン学科 教授
(一社)福祉防災コミュニティ協会代表理事 鍵屋 一氏

レポート

寒冷期の災害において命を護り、健康を維持するために

日本赤十字北海道看護大学 教授
災害対策教育センター長 根本 昌宏氏

インタビュー

日常と非日常をつなぐ日本初のフェーズフリーを採用。 小清水町防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」

小清水町総務課長(兼)小清水町DX推進室(併)選挙管理委員会事務局長 細川 正彦氏



空間写真©2023Nacasa&Partners Inc.

